

## ——目 次——

- 1 誰が聖女を殺したか？ 002
- 2 襲撃の後始末 062
- 3 初夜 086
- 4 親友の目に映ったもの 119
- 5 幕間 165
- 6 脱出 170
- 7 公爵邸への道 213
- 8 灰の王と狂信者 238
- 9 二度目の初夜 261

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のもの  
とは関係ありません。

ヴァレリーは聖女に選ばれた少女が待つ小屋の前に立った。

（もう日暮れか……………）

ここまでの道のりは長かった。

王都から馬でひと月、辺境も辺境だ。

疲れをため息に滲ませぬよう、居住まいを正して次期聖女に声をかけた。

「殿下、西方教会より参りました神殿騎士ヴァレリーと申します。王都までの護衛を仰せつかっております。どうぞ扉をお開けください」

返事はない。

妙だ。

村の者の話ではこの小屋に聖女となる少女リザを置いていると聞く。

（まさか聖女になるのが嫌で逃げ出したか？）

その責任の重さを思えばありうる話だ。

一緒にやってきた同僚たちは村で休ませている。この場にいるのはヴァレリーだけだ。

少女が待っているとおぼしき扉を開けても見咎める者はない。みとが

成人した男がやる行いではなかったが。

もう一度だけ、と丁寧な扉を叩いたが反応はない。

「殿下……失礼いたします」

周囲は林に囲まれている。

人の目がないことを確認してから、そつと扉を開けた。

夕焼けに染まった粗末な部屋が目に飛び込んでくる。そまつ

小屋には誰もいなかった。

少女の痕跡を感じさせる物は何もない。

ただ一つ、床に――。

おびただしい血だまりができていた。

「っ！」

すぐさま警戒態勢を取る。右手を掲げて魔力関知を行うが、周囲に反応はない。

小屋を囲む林は、微風そよかぜに葉を揺らしている。それだけだ。どこにも変化は見られ

ない。

――しかし。

疑念が渦を巻いていく。

一つ、殿下の遺体がないのはなぜか？ 殺害されたのではなく誘拐か？ それとも別人の血か？

二つ、私個人への攻撃に殿下が巻き込まれたか？

二つ目の予想ではないことを心の底から願った。

もしそうであれば、家を出て神殿騎士になった十年の歳月が無駄になってしまう。それだけは外れていてほしいと願う。

周囲の警戒に当たること、数秒。

敵影はない。

「はあ……」

深呼吸を一つして、息を整える。

——応援を呼ぶべきだ。

冷徹な理性が訴えてくるが、神殿騎士となって十年。仲間である彼らとはいっても距離を感じていた。

西方教会の神殿騎士の多くは孤児だ。

魔物に親を殺されたり、戦災に巻き込まれた孤児たちが手に職を持つ先として、神殿騎士が選ばれる。

その多くは平民出身であり、幼い頃から同じ教会で育っている者も多く連帯感が強い。

（だが私は違う……）

自ら裕福な家を出て、西方教会に入ったヴァレリーは彼らのなかで異質だった。

育ちが違うということにこれほど疎外感そがいを覚える経験は初めてだった。

なかには今回ついてきてくれたキールのように、仲良くしてくれる者もいる。

だが十四歳だった子供も十年経てば分かってしまう。

キールこそが例外であって、多くの騎士たちは裕福な家を出てまで神殿騎士になつた私を疎んじている。

特に今回、大司教から強制的に同行を命じられたアズノフとメルケル、その従者たちの態度は顕著けんちよだった。

『お貴族さまこそ、聖女の出迎えにいいんじゃないか？』

『貴族の家をわざわざ出てまで神殿騎士になるぐらい、お前は信心深いんだからさ。

国の要<sup>かなめ</sup>となる聖女さまの顔も一番に拝みたいだろ?』

俺たちは休んでるから、お前が迎えに行け。

彼らの態度が全てを物語っていた。

ひと月も馬にまたがっての道中だ。太ももはちきれんばかりに痛むし、足の裏もひりついている。

全身に疲れがたまっていた。

「分かってはいたが、堪えるな……」

神殿騎士に序列はない。

任命された年月が物を言う場所だ。

アズノフとメルケルは神殿騎士のなかでも特に古株で、私を目の敵にしている。

「キールにだけ来てもらおうわけにも行かないか……」

引き続き魔力感知の網を張りながら、血だまりの<sup>あみ</sup>前に膝をついて観察する。

血だまりの下層は黒く凝固しはじめていたが、上澄みはまだ赤い。

<sup>とさつ</sup>屠殺の時にできる血だまりに似ている。

獣をつるし上げて、血抜きする時のアレだ。

聖女殿下の血でないことを祈りながら、指先に魔力を込める。

神殿騎士は王都の治安維持にも当たっている。

事件解決のために一通りの検分手段を持っている。

（この血の検分もそうだ）

血だまりの中から赤い一滴が浮き上がる。

魔力を通した指先で触れると、脳裏に持ち主の姿が浮かぶ仕組みとなっている。

黒手袋を外し、素手で触れる。

——トクン。



自分の鼓動が大きく高鳴る。

指先に血の一滴が触れた瞬間、脳裏には何も浮かんでこなかった。

「……なん、だと……？」

これから聖女となる少女リザの姿でもいい。

あるいは獣の姿でもいい。

必ず脳裏に誰かの姿が浮かぶはずなのだ。それが何も出てこない。

（そもそもこれは『血』なのか？）

根本を揺るがす問いが浮かんだ瞬間、血だまりが震えた。

地震ではない。血だまりが自ら揺れたのだ。

まるで意思を持っているかのように。

「っ！！ 何者だ！」

問いかけと同時に立ち上がり、剣を引き抜いて構える。

血だまりはぼこぼこ泡を立てて、ふくれあがった。

それはヴァレリーと同じ身長にまでふくれあがり、泥人形のような形に変化した。顔はのっぺらぼうだ。目も鼻も口もない。

だが両手足はあった。

指先からは血だまりに擬態していたものがドロドロと床に垂れている。

（魔物のたぐいか？ いやしかし、それにしては——！）

もはや考えている暇はなかった。

赤い泥人形が襲いかかる。

一瞬でどろりとした両手が鋭利な刃に成り代わった。

ガキンツ。

耳障りな音を立てて、刃が交わる。  
みみざわ

神殿騎士は任命後すぐに教会の聖水で清められた一振りの白い剣を賜る。

刀身も柄も白いそれは《フォーマルハウト》と呼ばれ、魔物が体内に宿している

魔素をまたたく間に浄化する力を持っている。

（こいつが魔物なら、剣が魔素を吸い上げるはず——！）

狙い通り《フォーマルハウト》が魔素を吸い始める。

美しい純白の刀身があつという間に赤く染まるが、刀身の半分まで来ても勢いが衰える気配はない。

むしろ弱まるどころか、強くなるばかりだった。

（——！ 剣で吸い上げ切れない……！）

体が押し負ける。

長旅で疲れているとは言え、くさつても神殿騎士だ。

巨体の力に押し負けるほどヤワではない。

泥人形の魔素は《フォーマルハウト》一本で吸い上げきれる量ではなかった。

あつという間に限界が来た——。

握っていた剣がぐにやりと曲がる。

「――は……？」

まるで超高温の炎にあぶられた金属のように、魔素を吸い出した刀身が溶けていく。

「ッ!!」

すぐさま柄<sup>つか</sup>を手放す。

あと一秒長くもっていたら、手を焼かれていた。

身をもって体験しなくとも分かる。目の前で白い刀身が泥人形の中に溶けていったのだから。

（どうする？ 逃げるか）

しかし逃げたとして、村に被害が広がっては元も子もない。

同僚が休んでいる場所は辺境ののどかな村だ。

戦闘手段を持たない村人が多くいる。

そんな場所へこの泥人形を引きつれていくなど、愚の骨頂だ。  
なにか。

何か手はないか。

武器になるものはもう腰に差した短剣しかない。

《フォーマルハウト》をやすやすと溶かして取り込んだ事から、この泥人形に生半可な『浄化』は効かない。

接近戦もむずかしい。泥人形がまた高熱を発すれば、体がただでは済まない。

（ここに聖女はいない。となれば——！）

小屋から飛び出し、一息に高速詠唱を唱える。

振り向きざま、指を鳴らした。

『——鎖とぎさせ！』

言葉と同時に青い氷山が地面から隆起する。

泥人形が一瞬で氷に包まれる。

全身瞬く間に氷結し、背後に建つ小屋までも凍る。

足元は一気に霜がおりていった。<sup>しも</sup>

ヴァレリーの吐く息も白い。キーン、と耳鳴りが響きわたり顔をしかめる。

「はあ、はあ……」

ヴァレリーは肩で息をしながら、氷漬けにされた泥人形と距離を取る。敵が動く気配はない。

（とりあえず時間は稼げたか……？）

半径数メートルを絶対零度の領域に変える展開魔術。

それがヴァレリーの手持ちで唯一使える切り札だった。

「キールに連絡して、大聖堂に使いを出してもらおうか」

今後のことを考えると頭が痛い、何にせよ泥人形という明確な襲撃犯を捕らえ

たのだ。

やれることは多い。

仲間と合流できれば、今の展開魔術よりも更に堅牢な捕縛結界を張れるだろう。

そうすればこの泥人形も逃げ出すことさえできない。

夕焼けに染まった空は異様に赤く燃え立ち、目の前の氷のオブジェと相まって不吉な印象を与えた。

「秘匿<sup>ひとく</sup>回線の魔術通信を送れば……」

泥人形から背を向ける。

それがいけなかった。

——びしり。

氷のひび割れる音が響いた。音は断続的に響き、ますます増えていく。

これはたやすく破れる氷ではない。

膨大な魔力を繊細に操り、術者自ら解除するまで決して破ることはできない氷の檻<sup>おり</sup>だ。

だからこそヴァレリーにとって切り札となり得た。

事実、辺り一帯は霜がおりたままで、溶ける気配すらない。

なのにひびの入る音が聞こえたという事は――。

恐怖に心臓を掴まれそうになりながらも、振り返る。

美しかった剥き出しの氷は今や無数のひびが入り、その奥に包まれた泥人形の姿を歪めている。

「っ！」

一瞬で背筋が総毛立つ。

喉からせりあがってくる恐怖を必死に飲みくだしながら、短剣を構えた。  
もう手持ちの武器はこれしかない。



高速詠唱しようにも、今ので魔力が枯渇している。もう一度封印することはできない。

となれば肉弾戦が待ち構えている。

火傷の一つや二つで済めばいいが、その程度で終わらせてくれる相手には到底思えない。

「くそっ」

瞬きする時間さえ惜しい。

いつ氷の檻が破られるのか、その瞬間をヴァレリーは焦れる思いで待った。

その時、どこからか獰猛な唸り声が聞こえた。

ただの唸り声ではない。魔力が乗せられている。

音のひとつ一つが大魔術の詠唱に似た威圧感があった。耳に入るだけでも、心臓を締め上げられる苦しみがある。

「ぐっ……う……」

呼吸するのさえ辛い。

(……………新手か……………?)

首をめぐらせると泥人形の背後、ひび割れた氷山の奥に一頭の狼が立っていた。

純白の毛並みに澄み切った金色の瞳。大きく盛り上がった肉体は遅たくましく、四肢の先から生えた爪は絶対零度の氷を簡単にえぐりつつあった。

まるで氷雪が獣の形となって現われた美しい白狼だった。

白狼は一步で氷山を飛びこえ、今まさに飛び出そうとしていた泥人形を氷漬けのまま粉碎した。

たった一撃。

破片が辺りに飛び散り、内側に包まれていた泥も肉塊のように吹き飛ぶ。

「っ！」

とつさに顔をかばったが、赤い泥が頬や純白の騎士服にかかるのは防げなかった。

意外にも先ほどの高熱はなかった。すでに泥人形は死んでいた。

「お前は……一体……」

白狼は王国で神の遣いとして崇められている聖獣だ。

かつて西方教会の初代教皇の元に神の遣いとして降り立ち、その力を貸したと言われている。

今では教会内でもその話を信じるのは盲信派と呼ばれる人々のみで、多くの神官たちはおとぎ話と思っている。

（これもおとぎ話か？）

だが彼に命を救われたのは確かだ。ならば神殿騎士として礼を尽くすべきだろう。短剣を鞘におさめ、膝をつき頭<sup>こうべ</sup>を垂れた。

いついかなる時であっても、騎士は礼儀を重んじる。礼を尽くさぬ者には非礼が返される。

それは獣相手でも同じことだ。

言葉は通じずとも良い。ただ己の動作に礼を込めれば自然とそれは伝わる。

同僚のキールがこの場にいたら、無防備にも程がある！　と言うだろうがあいにく生憎と命を惜しむ体でもない。

家を捨てた時にそう決めたのだ。

『ほう。教会の者にしては見込みがあるな。貴様』

張りのある男の声が頭に響いた。

（念話？　いや、しかしそんな高度なことをやれる者が——）

『なんだ。俺が高度なことをやれるのがおかしいか？　人間』

霜が降りた大地をサクサクと四つ足で踏みしめる音が聞こえた。

好奇心に負けて顔を上げようとすると、冷ややかな声が降ってきた。

『俺の許可なく見上げるな。人間』

その言葉にはたっぷりの傲慢さと尊大さが含まれていた。

そして許可なく見上げた人間を簡単にくぶり殺す自信が狼の声にはあった。

視界の端でふさふさとした白い前足がちらつく。どうやら白狼は自分の周りをぐるぐると回っているようだ。

くんくん、と匂いを嗅がれる音がした。

肉食獣に獲物の品定めをされている気分だ。

心臓が悪い。

『アレの匂いがくびりついているな。だがお前の香り自体は良い。体臭か？　かぐわしいな』

騎士服のマントの中に鼻を突っ込んでまで、嗅いでくる。

ほんのりと湿った鼻先が太ももや脇腹、そして首筋にじゃれついた。

(まずい……………！)

本能的に体を引き離した。

これ以上匂いを嗅がれたら『アレ』に気づかれてしまう。

『アレ』だけは決して神の遣いであっても知られてはならない。  
いいや、神の遣いであればこそ絶対に。

『なんだ。俺のそばから勝手に離れるな。人間』

ぱくりと、マントをくわえられて元の位置に連れ戻される。まるで親猫が子猫の首ねっこをひっ掴むみたいに。

「ち、違うこれは……その……あなたの為であって……！」

くわえられた首筋は白狼の唾液でほんの少し濡れていた。

それだけで効果は抜群だった。

ドクン——！！

鼓動が早まり、全身から『アレ』が漏れていくのが分かる。

透明な空気のように漂うそれは、まちがいなく白狼の鼻や口に吸い込まれていた。

まずい、まずい、まずい！

心臓が早鐘を打ち、ぶわりと背筋に汗が浮かぶ。

『うん？ ……ずいぶんと面白い香りをさせる。ふむ……人間、お前、俺のつがいにならんか？』

おそれていた申し出が白狼から出されてしまった。

これでは苦心して家を出た十年間が無駄になってしまう。

ヴァレリーは息をつめながら答えた。

「で、できません……！」

聖なる獣のつがいになるなど、『アレ』を持つ自分には荷が重すぎる。

考えただけで、その責任の重さに体が押しつぶされそうだ。

だが聖なる獣はこちらの考えなど見向きもせず続けた。

『なぜだ？ 俺では不満か？ 我が名はクロエ。今代の白狼王にして、神聖なるフエリス神の遣い。人間ひとり娶って満足させるなど造作もないぞ』

くうん、と甘えた声ですり寄ってくるものだから、タチが悪い。

先程の猛々しきは消え失せて、生まれたての子犬のように甘えてくる。

そのまま後ろ足の二本で立つとじゃれあうようにとびかかってきた。

勢いに押されるまま、地面に押し倒される。

霜の降りた草むらがひんやりとして心地良い。

「た、頼むから待たれよ。今のあなたは正気ではない！」

『この俺がへたな魔術にひっかかるものか。毒も呪いも跳ね返すのだぞ』

ぐりぐりと腹に鼻先を押し付けて、つやつやと光る純白のしっぽを揺らす。

『早く返事をせよ。俺のつがいになるのだろう。断るなど許さぬからな！』

はっ、はっ！ と口を開きながら、太い舌で首筋を舐めては、甘噛みしてくる。

傍から見れば大型犬が飼い主にじゃれているように見えただろう。

だが相手は神の遣い、聖なる獣。

（しかも白狼王と言われたか……？）



歴代の聖獣のなかでも無尽蔵の魔力を持つ獣だけが許される呼称だ。

考えただけでそら恐ろしい。

この身が聖なる獣の王のつがいになるなど、あってはならないことだ。

だが迷っている内に、彼は前足から爪を出し、器用に騎士服の上着にひっかけて。ボタンがはじけて、上着が破ける。

「ッ!!」

（これ以上、さわられたらまずい……!）

胸元をかき寄せて肌を隠そうとするが、押し倒された状態では無意味だった。

『そうだ。貴様の名を聞いていなかったな。我が妻よ。何と呼べば良い?』

問いかけてくる獣はのんきな態度でじゃれついてくる。

名前を聞かせたら一巻の終わりだ。

魔術的な契約に使われるに決まっている。それだけは何としても避けたい。

先の唸り声に莫大な魔力を乗せていたことといい、この聖獣は本物だ。

空想の産物ではない。

『アレ』のせいで妻になるなど絶対に避けたい。

『どうした？ 恥ずかしがっているのか？ ヴアレリー』

「っ？」

名乗った覚えは一度もない。

それなのに知っているということは……。

『魔術の痕跡から術者の名を見分けるなど、俺にとっては些事さじだぞ』

あの氷の檻！

（術式は隠蔽していたはずなのに、それを見分けるなど！）

図らずも今代の白狼王の力の一端を見せつけられた気がした。

『良い名だなヴァレリー。うむ、俺の口にもよく馴染む。だからもう、刻んでも良  
かろう？』

何を、と問うのもばかばかしい。彼がいま刻むと言えはそれはたった一つしかなかった。

つがいとなる契約の印だ。

（そんなことをされたら、アレによって神聖な契約がねじ曲げられた事に……つ）  
「待つ——！！」

とめるより早く、ぼう、と赤い<sup>りんごう</sup>燐光が彼との間に産まれた。

そのまま燐光がヴァレリーの素肌に吸い込まれていき、全身に甘い痺れをもたらした。

「ッ♡　っ♡」

——この身はもはや白狼王のモノ。唯一の妻として彼に仕え、捧げなければなら  
ない。

その考えが<sup>のうずい</sup>脳髓を焼ききるほどの圧力で刻み込まれ、気づいた時にはへその下に

赤い刻印が刻まれていた。

三日月を思わせる独特の文様だった。どちらかが死ぬまで消えることのない契約の印。

一生涯に渡る契約。

それがこの赤い刻印だった。

『ふむ我ながら良いできばえだな。そう思わんか？ ヴァレリー』

褒めてもらいたそうにしつぽをすごい勢いで振っている。

（ああ、なんて事だ……）

あんたん

暗澹とした気持ちで頭を抱えていると、じれったそうにクロエに頭を押しつけられた。

なでろ、という意味らしい。

やけくそになりながらも、耳の間をかいてやると、クロエが嬉しそうに喉を鳴ら

した。

（まさかこんな事になるとは……）

——サキュバスの先祖返り。

それがヴァレリーの身に刻まれた呪いだった。

他人の体液に触れると体から淫魔のフェロモンが漂いだし、相手を籠絡ろうらくしてしまう代物だ。

（首筋をなめられなければ問題なかったというのに！）

思い返すも自らの浅慮せんりょが悔やまれる。

先祖がいつサキュバスと交わったのかは分からない。だが突然それはヴァレリーと共に生まれ、その人生に大きな影を落とした。

きっかけはまだ幼かった頃。

仲良くしていた庭師の息子の傷を癒そうと覚えたての癒やしの魔術を使おうとし

て彼の血にふれた時、悲劇は起きた。

突然押し倒され、服を脱がされて唇まで奪われそうになった。

すんでのところ屋敷の者に助けられたが、あとには苦い結末が待っていた。

長年仕えてくれた庭師は親子ともども追放され、父からは厳しい叱責を受けた。

その後も度々事件は起き、成人が近づいた頃には人と触れ合うことを避ける人間になっていた。

だがヴァレリーは嫡男だ。

今後、社交の場に出る機会はどんどん増えていく。そんななかで生きていけばまた『事件』が起るに決まっている。

父や母、そして弟に迷惑をかけることは必死だった。

だから家を捨て、神殿に入ることにした。

神に仕えることで、この体の呪いも清められればと願って生きてきた。

例え口さがない同僚に何と言われようとも、ヴァレリーの生きる場所はもうここ

しかないのだ。

幸いキールというささやかな友人はできた。

それだけでもう十分だった。

なのに――。

（なぜよりもよって白狼王と……！）

神の遣いと呼ばれる存在と深い繋がりを得られたことは喜ばしいことだ。だがそれもこの身の呪いからと知れば、喜びも半減する。

つがいになったと言っても、聖なる獣を墮落させたようなものだ。

神殿騎士としてあるまじき失態だった。

結局どこまで行ってもこの呪いは自分の人生についてまわる。

あまりにも理不尽で、どうしようもなく不合理な呪いだった。

（なぜ神はこの呪いを解いてくださらない……！）

まだ信心が、信仰が、修行が足りないのか。

一体どうすれば解放されるというのか。

手のひらに爪が食い込むほどきつく拳を握りしめると、悔しさから瞳がうるむ。ふと、ぺろりと赤い舌で頬を舐められた。

「っ？  
！」

『ん？ 泣くほど嬉しかったのだろう。こういう時は男の甲斐性かいしやうの見せ所だと聞くぞ』

ぺろぺろとこぼれ落ちる涙を吸い取られていく。

金色の瞳を細めて笑うクロエの姿は、主人の哀しみを必死に慰める忠犬のようだ。呪いかけられたというのに、この聖なる獣の行動は慈愛に満ちあふれていた。先ほどの傲慢さが嘘みたいだった。

「……っ」

思わずその巨体に抱きついた。クロエは避けもせず、ヴァレリーの体を受け止め



た。

はじめて声を殺して泣いた。

今までに遭遇した男たちや女たちの肉欲にまみれた姿が思い浮かんで、消えていった。クロエはヴァレリーが泣きやむまでずっと待っていてくれた。

今までの連中は自分の体にむしゃぶりつこうと迫ってくる者ばかりだった。けれどクロエは落ち着き払っていた。

白狼王だからこそ成せる技なのか、今は分からない。

しかし今までの者たちと違うのは確かだった。

サキユバスの先祖返りというおぞましい呪いを受けたはずなのに、彼は堂々とした態度でつがいとなった人間の悲哀を受けいれている。

その事実にはヴァレリーはほんの少し気持ちが軽くなった。

『落ち着いたか？』

「ああ、すまない。気を遣わせてしまったな」

『気にするな』

呪いのせいであつたことを持つ事になつてしまつたというのに、クロエはけろりとしていた。

つきん、と胸が痛む。

このままにしていはいけない。きつちりと真実を話さなければ。

それがクロエに対するヴァレリーができる唯一のけじめだ。

「その、あなたに話しておかなければならない事がある。私は――」

こちらに駆けてくる足音が聞こえた。

数は複数。

村人ではない。

金属のこすれる音がする。

神殿騎士たちだ。

「おい、ヴァレリー！ これは一体どういう事だ！」

同僚のアズノフが林から姿を現した。背後にはメルケルや従者たちが剣を構えている。あまりに物々しい態度だった。

「キールの奴がお前の帰りが遅いから心配だと喧やかましいから来てやったって言うのに、聖女さまはどこへ行った？ まさかお前、殺したとか言わねえだろうな？」

「つ馬鹿なことを言うな！ そんなことはしない！」

しかしアズノフはこちらの話をもったく聞いてくれなかった。

「じゃあ、お前の顔にかかった返り血はなんだ？」

言われて、赤い泥人形がはじけ飛んだ時の残りかすが頬にこびりついていた。

アズノフは滔々と語り続ける。

「しかもこの大規模な展開魔術の痕跡。こいつはどう考えてもお前が聖女暗殺を試みたという事だろう?」

背後に立つ彼の部下がアズノフに何か耳打ちした。もったいぶった仕草でアズノフが頷く。

いやな予感がした。

「ふむふむ。しかもこの一帯だけ魔力感知ができなくなっている。お前は神殿騎士のなかでも随一の魔力量だったから、こいつは俺たちの捜査を妨害しているという事か?」

「私はそのようなことは断じてしていない——!」

「さらに大型魔獣も伏せていたとは、これは討伐対象だよな?」

アズノフの問いかけに仲間達が一斉に武器を構える。その切っ先はまっすぐにヴ

アレリーに向かっていた。

「何を言って……」

見上げたクロエの姿は先ほどと変わらず純白の狼だ。

神殿騎士であればこの白い狼の姿を見れば、聖獣と分かるものだ。なのに彼らは一様にクロエを鋭い視線で睨<sup>にら</sup>んでいた。

（なんだ……一体なにが起きている）

足元から見えないツタが己の足にからみつく感触がした。

誠実に言葉を重ねれば彼らだって同じ神殿騎士だ。分かってもらえると思っていた。

けれどアズノフは最初からもうすでに決まった台本を読むかのように、つらつらと罪状を述べていく。

まるで死刑宣告だ。

見えないツタが足から腹、そして喉元にまで迫る。

この十年何事もなく神殿騎士の務めを果たしてきた。

神に仕える騎士として、礼節を重んじ、高潔な心を育んできた。

あの呪いがあるとは言え、不届きな行いをした覚えはない。

なのにアズノフはヴァレリーの釈明を一切聞かずに話を進めていく。

「西方教会が一の騎士アズノフが唯一神フェリスに成り代わり、聖断をくだす。本日をもって騎士ヴァレリー・ミレルは神殿騎士の地位を剥奪。我が教会の聖女候補リザ・スウィフトを謀殺せしめ、聖女の産まれし村に魔獣を放った罪により討伐対象となった。この男を断罪せよ！　我が同胞たちよ！」

アズノフの宣言と同時に仲間たちが散開した。

まばゆいほどの白い燐光が騎士たちの手から産まれ、周囲を取り囲まれる。

（捕縛結果？　いや違う、これは——！）

敵を殲滅する時にのみ使われる塵殺結界の予兆だった。罪人狩りでたまに見かける代物だ。決して同僚だった仲間になつて放つべき代物ではない。

魔力はもうからっぽだ。

防衛陣を張ろうにも、資源となるべき魔力が枯渇している。

聖女の出迎えに回復薬は必要ないだろうと仲間達に旅装を解かされて、ここへやって来た。

あれもまたアズノフの計算の内だったのだろうか？

今となつてはもう真相も分からない。

ここを逃げなければ生き延びられない。

けれど足が動かない。逃げるあてなど、ヴァレリーにはもうないのだ。

生まれた家を捨て、信仰にすがった教会にも仲間にも見捨てられた。

どこへ行けというのか……。

辺り一面をおおうように光の矢が一斉に放たれる。

(せめて、この方だけでも……！)

クロエの体を守るように一歩前に出れば、くふりと背後で笑う声があった。

『いいぞ！　ますます気に入った。この俺を守ろうとする人間など、貴様が初めてだ。ヴァレリー！』

心底嬉しそうに快哉かいさいを叫び、白狼は天高く吠えた。

莫大な魔力を乗せた一声。

それは地面を揺らし、生い茂る木々を震撼させ、眼前に迫る白い光を文字通り頭上へとねじ曲げた。

膨大な光の奔流は雲を蹴散らして、夜空を白く照らす。

そして足元から突風が吹き上げた。

立ってられないほど激しい風に煽あおられ、とっさにクロエの体にしがみつく。



元同僚たちの多くは吹き飛ばされ、林の幹に激突した。

気絶してうなだれるものが続出し、あつという間に形勢は逆転していた。

『ふふん。妻を守るのは夫の務めと言うからな』

むふ、とクロエが満足げに鼻息を鳴らした。

褒めろと言わんばかりにふさふさの胸をそりかえす。

「……す、ごい……な……」

『そうであろう、そうであろう？ もつと褒めたたえよ！』

ぐりぐりと頭を脇の間にはさませて、撫でろとせつつく。

クロエの脇腹が尻に当たり、太い尻尾を太ももに打ち付けられた。

上機嫌だ。

頭をなでてやり、喉もくすぐってやると嬉しそうな鳴き声を漏らした。

（白狼王に見えないな）

苦笑しながら、吹き飛ばされた元仲間たちを見やる。

もはや立ち上がる者はいない。皆クロエの反撃に度肝<sup>どぎも</sup>を抜かれ、茫然<sup>ぼうぜん</sup>自失<sup>じしつ</sup>していた。

「……………悪魔だ」

ぽつりと倒れていた騎士の一人が言い出し始めると、皆、堰<sup>せき</sup>を切るように聖なる獣を悪魔とそしり始めた。

「異教徒め！ 俺たちの中にもぐり込んで何を企んでいた！」

「元貴族と聞いておかしいと思ったんだ！」

「飯も寝床の心配もいらない奴が神殿騎士なんかになるはずがない！ どうせ俺たちのことも心の中じゃあ軽蔑してたんだろう！ だってあんたは公爵家のご嫡男だもんなあ！」

この十年、互いに真正面から向き合おうとせず、見て見ぬふりをしてきた結果がいま彼らの口を通して吐き出されていた。

——分かっていた。

とうに分かりきっていたことだ。

親を亡くし、住む場所もなくなった孤児の彼らが元貴族である自分をどれほど嫌  
い、憎んでいるか。

暖かい寝床がある。

家族は生きている。

食事には困らない。

そんな人間が目の前に現れたら、自分のみじめぶりをいやでも痛感させられるじ  
やないか。

——お前は俺たちの『仲間』じゃない。

『仲間』に入りたいのなら、屋敷を焼かれ、家族を殺され、地位を剥奪されてから  
やって来い。

でなければ仲間とは認めない。

地面に倒れたままこちらを睨むアズノフの瞳がそう物語っていた。

（もう無理なのか……）

彼らに寄り添おうとした事は何度もある。だがその度に申し出は跳ねつけられた。「貴様は聖女殺しの悪魔だ！ 俺たち西方教会の敵だ！ あの方の仰った通りだった……お前はどこまで行っても異物なんだよ、ヴァレリー！」

「あの方？ それはどういう——」

彼はこちらの疑問に答える気は元から無かった。

懷から大粒の黒い水晶玉を取り出し、それを決死の表情で口の中に放り込んだ。ごくり、と。

太い猪首に黒玉が飲み込まれていく。

『いかん！ 離れろ！』

クロエに首根っこをつかまれて、背後に飛びすさった。

皆、口々に黒玉を飲み込んでいく。

その瞬間、神殿騎士の象徴たる純白の鎧が一瞬で黒く染まり、ヘドロのような液体となって、地面に落ちた。

だらりと立ち上がった姿には、もはや騎士の威厳はなかった。

まさに異形の怪物だ。

先ほど対峙した泥人形に驚くほどそっくりだった。その共通点に気づき、ヴァレリーの背筋に冷たいものが走る。

（まさかさつき戦った相手は……）

この村に到着する前、先触れ<sup>さきふ</sup>として村に使わした騎士がひとり戻ってきていないと報告があった。

最も若い少年だった。どこかの貴族が侍女に手を出して産まれたという妾腹の子どもで教会の軒先に捨てられていたと聞いた。

十五で行われる成人の儀をようやく済ませたばかりで……。

胃液が逆流して、思わずヴァレリーは地面に吐いた。

数分前、自分が『何』をしでかしたのか。

それが分かって、たまらなく恐ろしい。

あの少年は、元貴族の自分にも良くなついてくれていた。

（あの時……もしや彼は助けを求めていたのか？）

今となつては分らない。

何せ『彼』の顔には目も鼻も、口もついていなかったのだから。

あの時、『彼』はどんな思いで自分に近づいたのだろうか？

救つて欲しくて手を伸ばしたんじゃないか？

疑問が渦を巻いて、罪悪感に体を苛さいまれる。

しっかりと構えていた短剣がうまく握れない。そこへクロエの驚愕の声が響く。

『みずから魔素の塊かたまりを飲み込むとは正気か。こやつら！ 辺りの魔物がこちらに

一斉に集まってきておるわ。みずからを餌にして魔物を呼び込むとは、人の子もよくやる……。おいヴァレリー、魔物が集まる前に奴らを噛みちぎって良いか?』

寧猛な唸り声で現実に取り戻されるが、ヴァレリーは答えられなかった。

なぜならあの泥人形は数分前まで同じ場所で寝起きをともし、生活してきた仲間たちなのだ。溝を感じてはいても、彼らがどんな生まれで、何が好物で、どんな任務を達成してきたか、全て覚えている。

あれだけ嫌われても、こんな最期はむごすぎる。

心が折れていた。

彼らと対峙する勇気がすっかり消え失せていた。

武器や魔力があつたとしても、戦う気構えがなくなった騎士など戦場ではお荷物でしかない。分かっているのに体が固まって動かない。

『ヴァレリー!』

クロエが金色の瞳で睨んでくるが、答えるべき言葉が出てこない。

『ヴァレリー・ミレル!!』

雷の如き大音声だいおんじょうでクロエに名前を呼ばれた。

黄金の瞳がこれでもかと見開き、自分を見ている。

アーモンドのように美しい双眸に自分の顔が写る。

頬はやつれ、目は落ちくぼみ憔悴しきった男の顔。とても神殿騎士には見えない。

首筋や鎖骨にはあの泥人形が残した返り血が残っていた。

純白の騎士服は破けて、ひどいありさまだ。

ひとびとに審判をくだす神フェリスに仕えるにはあまりに似つかわしくない。

『俺がつがいになろうと思った人間は、どんな逆境であっても心折れぬ者と知れ。

だじやく 懦弱な人間など俺が許さぬ。貴様がまだ騎士であるならば、剣が折れ、矢が尽きて

も戦え。ここで心折れるのなら、俺が貴様を食い殺す』

黄金の瞳の奥に炯々けいけいと燃え上がる炎を見た。



まばゆいほど白く、目がくらむほどの神の火。

まさに白狼王にふさわしき威容だった。

それは自分の忌まわしき呪いにかかった獣の目ではなかった。

彼はまごうことなき神獣だ。

たった数分で折れきった自分の心を性根からたたき直してくれる、まさに灼熱の鉄槌にも似た何かだ。

硬く強靱な刃は、同じように硬く熱い槌つちによって作られる。

クロエの言葉はヴァレリーの折れた心を継ぎ足し、まっすぐに導いてくれる。ようやと体の緊張がほぐれ、唇が動く。

「……おそろしい御仁だな。あなたは」

なんとか苦笑を浮かべたのは、同じ男としてのプライドからだった。

『ふん。俺以外の者に心奪われるなど許しがたいからな』

ぷいっと顔をそむける姿に、もう先ほどの恐ろしさは感じられなかった。

もう一度、短剣を強く握りしめる。震えはまだわずかに残っていたが、彼にここまで言ってもらえたのだ。

ここで心折れるなどもつてのほかだ。

深く息を吸い込み、状況の確認につとめる。

後悔や懺悔ざんげは生き残った後にすればいい。今はここを切り抜けることが先決だ。

『いい顔だ。そういうキリリとした顔の方がお前には良く似合う』

「ちやかさないでくれ。で、どうする？」

包囲網は徐々に狭まりつつあった。

『決まっている。我が魔力で目の前にたちはだかる敵を粉碎するまでよ』

クロエの胸がにわかに盛り上がる。ふさふさとした毛並みの奥に逞しい胸筋が見え隠れした。白狼が深く息を吸い込む。鼻の穴が大きく広がり、彼が逆襲の一手を

進めるのがはつきりと伝わった。

『私の姿を正しく見ることも叶わぬ哀れな《成れ果て》どもよ。神罰を受けるが良  
い——！』

黄金の瞳がカツと見開かれた瞬間、地面がえぐれた。大量の石つぶてが空中に浮  
かび、そのまま泥人形たちの体をつらぬく。

背後の林に泥人形と化した仲間たちのちぎれた体がかけられていく。おびただし  
い量の泥が林一帯を黒く染め上げ、深緑を穢<sup>けが</sup>した。

仲間達が立っていた場所には泥まじりの石つぶてが積み上がっていた。  
まさに圧倒的な猛威だった。

（……この光景をむごいと思っではいけないな）

クロエとともに自分が成し遂げた光景なのだ。自らの手を仲間の血で汚す覚悟を  
決めたのは自分なのだ。この痛みを忘れてはいけない。

ヴァレリーはきつく拳を握り込んで、彼らの最期をその目に焼き付けた。

夕日はすでに落ち、空には白い満月が昇ろうとしていた。

この程度で終わる筈がない。

そんな予感がヴァレリーにはあった。

アズノフの妄執がこの程度なら、きっと彼とは和解できていたはずだ。

それに彼が残した言葉——あの方とは一体だれなのか。

その人物こそがこの惨劇の首謀者なのだろうか。

『第二陣が来たようだぞ』

クロエの言葉とともに、薄暗い林の奥から獰猛な唸り声がいくつも響いてくる。

魔獣だ。

その数、百はくだらないだろう。これを全て相手にしては埒が<sup>らち</sup>あかない。ヴ

アレリーは冷静に思考を切り替えた。

「村へ向かうことはできるか？」

あそこならキールもいるはずだ。それに魔力を回復する薬もあるだろう。キールが無事でいてくれればいいが……。

とにかくいまは一度、態勢を整えたい。

ヴァレリーの意図をすぐにクロエは察した。

『俺の背に乗れ』

その言葉と同時にクロエにまたがった。

魔獣が林から飛び出してくる。

あくらつ

ゴブリン

悪辣さでは随一の小鬼ども、幻惑で人を騙し陥れる三角獣、さらには双頭の獅子。

バイコーン

種族も体格も異なる魔獣たちが元仲間たちの屍を踏みしだき、迫りくる。

クロエは地面を強く踏みしめ、短い助走をつけた。今にも先頭の魔獣と鼻先が触れ合いかける瞬間、クロエの背中が大きく地面に沈み、浮いた。

「っ！」

振り落とされないようしっかりと純白の毛並みを掴む。

気づいた時にはクロエの前脚が魔獣の鼻先を踏みつけ、空中へと駆け出す。

まるで足場があるかのように、夜空を蹴りつけて渡っていく。

冷たい夜風に頬をなぶられるが、目の前の非現実的な光景にヴァレリーは夢中で冷たさを感じる暇もなかった。

月をさえぎる叢雲むらくもはなく、藍色の空には銀砂をばらまいたような星々が瞬いている。

魔獣の声もここまでは届かない。

まるでおとぎばなしのような光景に、沈みきっていたヴァレリーの心が少年のよううに浮き立つ。

ずっとこんな光景を見られたら良い！

しかし現実はそうも言っていられない。眼下には魔獣たちの瞳や体から漏れる魔素の赤い光がそこらじゅうで蠢うごめいていた。

あつという間に赤い燐光は渦となつて、辺境の小さな村を囲いこむ。

『ふん。連中の食べた魔素の塊が呼び水となつたか。ここまで集まるとはな。どれ、急ぐぞ』

高らかにクロエが遠吠えを放つ。それは夜の闇に吸い込まれ、木霊こだましていった。聴くものにどこか安心を与える鳴き声だ。

さざ波のように森へ波及し、魔獣たちの赤い光を数割かき消していった。

眼下の森がふだんの落ち着きを取り戻していく。それでも完全ではない。魔獣はだいぶ残っている。それでも――。

「ははっ。あはははっ」

自然と笑いが漏れた。

このおとぎ話みたいな光景のせいなのか、クロエの圧倒的な強さのせいかは分からない。

だが彼の非常識なまでの猛威は、ほんのひと時、仲間から受けた積年の憎しみや、幼い仲間を手にかけた恐怖、そして聖獣であるクロエを騙すようにつがいになった不安を忘れさせてくれる力があつた。

ヴァレリーはそつと彼の豊かな毛並みに頭をうずめた。

こつんと額を当てて、夜風にそよぐうぶ毛に敬愛の口づけを落とす。

——ありがとう。

きつと聞こえていないだろうけれどそれで良かった。

ただ感謝の意さえ伝われば良いのだから。

ふすり。

満足そうに笑う狼の息遣いが聞こえた。

振り返ると、視界の端でしつぽが上機嫌で揺れている。心なしかクロエの毛並み



も艶が増しているように見えた。

あつという間に村が近づいてきた。一部の村人が夜空を走る白狼を見て、大声を上げている。

『お前の言っていた村とはアレか。ちょうど村の男衆を指揮している騎士がいるな。あれがお前の仲間か?』

良かった。無事だったらしい。

見慣れた赤毛の友人が采配をふるっている。

「そうだ、キールという私のかけがえのない友人だ」

神に仕える身でありながら娼館通いするという少し困った趣味をもつ男だが、仕事では頼れる人物だ。

夜目にも鮮やかな赤毛を揺らして、村に入りこむ魔獣を少しずつ切り崩していくのが見えた。

村人のなかでも弓の扱いに慣れた獵師連中を駆り出して、今のところうまく対処

している。

しかしクロエは空中でぴたりと動きを止めてしまった。  
村に降りてくれない。

「? どうしたんだ」

『……………かけがえのない、とはどういう意味だ? まさかもうあの赤毛の男に手  
籠めにされているのか? まさかもう処女ではないと!?』

「は?」

クロエの言葉の意味を理解するのに数秒、必要だった。

（手籠め? キールが私に? いやそもそも処女ではないとは一体どうい——）  
そこでクロエの言葉の意味がはつきりと分かった。

一気に頬が熱くなる。

「何を馬鹿なことを言っている! キールとはただの友人だ! かけがえのない、

とは私の数少ない友人だからそう例えただけで、他意はない！」

ひどい誤解だ。

キールは親友であり、多少だらしない面もあるが頼れる同僚だ。それ以上でも以下でもない。

『そうやって頬を染めるところが怪しい』

「怪しくなどない！　そもそも……男が男に……だ、抱かれるなど……！」

それ以上は恥ずかしくて、口にするのはばかられた。

『ふむ。もしや童貞か？　おぬし』

「っ！！　い、今の事態には関係ないだろう！」

『童貞か。これは仕込みがありそうだな』

「なっ！　ふざけたことを！」

だが否定しても、彼と今日つがいになったことは事実だ。雄同士がつがいになるなど聞いたことがない。

（毛をむしりとしてやろうか……）

不遜ふそんきわまりない考えがよぎったが、上空で振り落とされたら落下死はまぬがれない。

とにかく今はクロエとこんなばかげた話を交わしている状態ではなかった。

魔獣が村に迫っているのだ。先ほどの咆吼で数を減らしたとは言え、全てではない。このまま手をこまねいていたら死者が増えてしまう。

ヴァレリーは目をすがめて、クロエを睨み下ろした。

「疑問が晴れたようなら村に降りてもらっても宜しいでしょうか？ 白狼王どの」

『む？ その呼び方どこかトゲがないか？！』

「神の遣いである御方を名前で呼ぶ方が間違いでは？」

冷やかな声でこたえと、クロエの耳がぺたりと伏せられた。

『さ、更に距離を感じる口調になっているではないか。さっきみたいに名前で呼ん

でくれて構わんのだぞ?』

クウウンと甘えた声で媚びてくるが、人の友人を勝手に誤解してくれたのだ。ここで折れるつもりは一切ない。

「まずはお務めを果たされてはいかがですか?」

冷厳<sup>れいげん</sup>と言い放つと、クロエは渋々と村におりていった。

面白い人間だ。

成り行きでつがいにしてみたが、俺の行動にいちいち反応してくれる。

今までに遭った人間はどれもこの白い毛並みと金色の瞳に恐れおののき逃げ出すか、祈り出す連中ばかりだった。

しかも『神官』と呼ばれる連中は俺を悪魔の使いとそしり、生まれた時から純白のこの毛並みを汚らしい灰色と称した。

さっきの連中もそうだった。なぜか連中は俺の毛並みを灰色と認識する。

魔獣のなかでもひとときわ<sup>どうもう</sup>寧<sup>こうち</sup>猛で狡知にたけた灰色狼と同列に語られるなど、言語道断だ。

これほどばかばかしい事があつてたまるか。

だからヴァレリーを見た時はどうせこいつもあの『神官』どもと同じ反応をするのだろうと思っていた。

だが驚いたことに彼は俺の前にひざまず跪き、こうへ頭を垂れたのだ。

騎士という生き物が頭を垂れるのは、命を差し出すことと同じだと聞いていたから余計に驚かされた。

それは俺の前に心臓を差し出すことと同じだ。

簡単にくびり殺すことができる。

なのに彼は気負いもなく、それをやつてのけた。

だから興味をもったのだ。

なにやら契約の印を結んだとき妙になにかをしきりに気に病んでいたが、問い詰める気はない。

——俺は甲斐性のあるオスだからな。

ふふん、と上機嫌で鼻を鳴らし、空を駆ける。

背中に乗せたヴァレリーの重みが心地いい。

それと必死にしがみついてくる体が可愛いらしい。

（この戦いが終わったら身も心も俺の妻にしてやる）

その程度の知識は獣の俺にも備わっている。遠い街に住む人の子の会話を盗み聞くなど、俺には造作もない。人間ならばどんな性別でも問題なかった。

首をなめた時の反応からみると、相当敏感なのは間違いない。

今夜が楽しみだ。

聖なる獣などと呼ばれてはいても、中身はこの俗物ぶりだ。生まれてこの方、神と出会ったことがないのも頷ける。

今さら己の神に出会ったところで、生き方を変えるつもりはないが――。

それよりもヴァレリーと話す方がよっぽど面白い。

彼との会話は予測がつかない。



さっきだつてそうだ。

キールという男を妙に心配していたからつがいとして気になっただけに、彼は友人との仲を誤解されたとへそを曲げてしまった。

しまいには他人行儀な言葉遣いをし始め、大いに困惑させられた。こんなことは初めての経験だ。

ヴァレリー

人の子との会話はおもしろい。

だが彼とこれからも会話を楽しむためには、まずやるべき事がある。

俺は前足から鋭い爪を伸ばした。

『邪魔者は疾く、去ね!』

村の入り口近くに群がる魔獣たちの赤い燐光に向けて、前足を振るつた。

たったそれだけの動作で夜空に白い竜巻が生まれた。暴風は村人や粗末な小屋を傷つけることなく、ただ魔獣の体のみを夜空に巻き上げた。

赤い光が白い竜巻に引き上げられ、一気に巻き取られていく。

さらにもう三つ竜巻を蹴り出し、村の東西南北に強大な暴風の柱を立てる。背中でヴァレリーが息を呑む音が聞こえた。

その吐息に満足しながら村へと降り立つ。

にわかには村人たちが、俺とヴァレリーを取り囲む。

「なんだ……？ でっけえ白い狼？」「新しい魔獣か？」

「いや人が乗ってる……あの服、騎士さまでねえか？」

突然のちんにゅうしや闖入者によって村人たちのあいだには困惑が広がっていた。

『村人たちに説明してやれ』

「あなたは どうするのだ？」

『俺は俺のなすべきことをやるのみだ』

ぶるりと尻尾を揺らし、背中からヴァレリーをおろすと、村の四方にそびえたつ

白い竜巻を見つめながら、天に向かって息を吹いた。

その瞬間、四本の巨大な柱がゆっくりと地上から離れ、夜空へと浮き上がる。

荒れ狂う太い柱はまたたく間に圧縮し、村の上空を丸く包み込んだ。そして竜巻によって巻き上げられた魔獣たちの肉体を村の外へと噴き飛ばした。

それは赤い流星群にも似ていた。

本来、魔獣の瞳に宿る赤い燐光は恐怖の対象だが、今夜だけは上空を紅玉ルビーのように美しく染め上げた。

避難していた村の女や子どもたちが歓声を上げて、この摩訶不思議な光景を見送る。村の防衛に駆り出されていた男たちも今やその手をとめていた。

数分も経てば、紅玉ルビーの流星群は終わりを迎え、村にいつもの静寂が戻っていた。

魔獣たちの唸り声はもう聞こえない。

男たちのほっと息をつく音がそこかしこから響いた。苦難は去ったのだ。

「ヴァレリー！ おまえ無事だったのか！」

村の入り口で防衛を指揮していたキールとやらがいつの間にかヴァレリーの近くに寄ってきていた。

赤毛のなんだか軽薄そうな男だ。きまじめなヴァレリーの友人にはとても見えな  
い。

「アズノフの奴らはどうした？ 連中、お前の戻りが遅いから小屋の方に向かった  
んだが、会わなかったのか？」

駆けつけたキールに矢継ぎ早<sup>やつばや</sup>に尋ねられ、一瞬ヴァレリーが言葉につまるのが見  
えた。

迷うように俺を見る。真実を話すべきか否か。

——やめておけ。

そつと首を振ると彼は一瞬だけ苦しそうな顔を浮かべたあと、目であなづいた。

「その話はあとだ。今は村長どのに話をつないでもらいたい」

「そうか……それもそうだな」

キールが懷から魔力回復薬の小瓶を取り出して彼に渡した。

「飲めよ。こっち来る前に一戦交えたんだろ？ おまえ凄い格好してるぜ。ま、オレは目の保養になっていいけど」

ヴァレリーの上着は破けて、胸元から腹部まで丸出しとなっていた。彼の腹に刻んだ刻印は俺の神気で隠しているから他人には見えないが、ほかの男が俺のつがいにふれようとする姿は正直、気分のいいものではない。

グルル、と唸り声を上げるとキールの手が止まる。

「え、なに。なんなの？ この白い狼。まさか聖獣さまとか言わないよな？」

「その話もあとでしてやる。それと予備の長剣はあるか？ 正直、腰に何も武器がないのは落ち着かない」

「はいはいお姫さま。仰せのままに」

相手を茶化すもの言いにヴァレリーの眉根が困ったように寄せられる。

「誰がお姫さまだ。相変わらずお前は緊張感がない」

「その方が緊張がほぐれていいだろ。こういう時こそユーモアが大事だ。違うか？」  
にんまりと笑う顔に、どうにも憎めなさを感じる。

これがキールという男か。

ヴァレリーが彼を友人として信頼している意味がなんとなく分かった。ただヴァレリーとの距離が妙に近い。近すぎる。

『ヴァレリーは俺の妻だからな！』

思わず心の声が念話となって響いていた。

もちろんヴァレリーにも伝わり、彼の頬が見る見るうちに赤くなっていく。

「おいどうした？ 顔色が変だぞ」

「っ！ なんでもない……！」

赤面したヴァレリーが俺を睨みつけてくる。

『む？ やるのか？ いいぞ。閨でならいくらでも相手になってやる。このあとのことを考えると、楽しみでたまらんしな』

にんまり笑うとヴァレリーは頬を赤くしたまま、ジト目でにらんできた。

「くっ！ あなたはもう少し節度を知れ」

背中の毛を容赦なくむしられた。

『痛い！ 痛いぞ！』

キャンキャンと可愛らしく吠えたててみたが、ヴァレリーはそっぽを向いていた。

（ふん見てろよ。今夜はとことん抱き潰してやるからな）

この鬱憤うっぶんはあとでしっかりとヴァレリー本人に請求してやろう。

ヴァレリーがキールに案内されて、村長のもとへと向かう。ついて行こうとしたが、村長を怖がらせてはまずいと言われて待機するはめになった。

待っているあいだ、好奇心旺盛な子どもどもに体をべたべたと触られるのは、ひ

どい苦行だった。

これがヴァレリーの手ならいくらでも我慢できるのに。



(ようやくひと息つける……)

ヴァレリーは疲れ切った村人たちに挨拶して、今宵借りた家に向かった。

聖女候補の少女は今も行方不明だ。

彼女の生死は結局分からずじまいだった。ふしぎなことに村人たちは聖女候補の少女は存在していると認識しているのに、その少女の姿はほとんど思い出せないのだ。

幻惑の術式でもかけられているのかと思ったが、その痕跡もない。

アズノフが知っていたのかもしれないが、この状況ではもう聞くことも難しい。

彼らがなぜ、あんな禍々しいモノを持っていたのか。魔獣まで呼び寄せるなど、



騎士のする行いではない。

それになぜ彼らは白狼クロエを『魔獣』と称したか。

なにか……。

そう、なにか自分の知らない事態が神殿内部で起きている。

（これは早急に王都に戻って報告する必要があるな）

だが王都に信頼できる人物が果たしてどれだけいるのだろうか。

考えれば考えるほど悩みの種は尽きない。

眉間に深いシワを刻みながら、今晚の宿となる家の扉を開いた。

「戻ったぞ。キール、クロ——！！」

小屋のなかに入った瞬間、クロエに抱きつかれて、思わず尻餅をついた。

「ちょー！　こら……！」

こちらの言うことも聞かず、頬をなめまわされ、首元も甘噛みされた。

しまいには破けた服に隠れた肌の匂いまで嗅がれる始末。

「っ！ 分かった！ 分かったから離れてくれ」

同僚のキールもこの部屋にいるのだ。

宥めようとするが、この狼はまったく言うことを聞いてくれない。

『お前は俺の妻だろう。早く抱かせろ』

「は？ はあ……っ？ ！」

突然の申し出に頭が混乱する。

今後のことをあれこれ考えていたのに、クロエの今のひとことで全て吹き飛んでしまった。

なんだか今までじっと考え込んでいた自分がばかしく思えてくる。

確かに魔獣の大襲来という障害は去った。今は自分が生き残ったことを喜ぶべきなのだろう。

ヴァレリーは両手を広げて、降参のポーズを取った。

「ぷっ。ははっ……君という奴は……。そうだな。存分に抱きついていいぞ」

すると、なぜかクロエの態度がすんっと冷ややかなものになった。念話でぐちぐちと呟く声が聞こえてくる。

『……ぐぬぬっ。……この……これだから……童貞は！』

クロエの太いしっぽが猛烈にふくらみ、なんだか不機嫌そうだ。今のは失礼な答えになってしまったのだろうか？

しかし理由が思いつかな——。

「っ!!」

度重なる戦闘で疲れ切っていた頭がようやくと事態を把握する。そうだ。

彼に求婚されたのだ。

契約の印まで体に刻まれて、つがいになると約束させられた。

つまり『抱く』ということは、じゃれつきたいという意味ではなく、正真正銘、自分の体を雄として抱きたいということ……。

そこまで考えついたところでヴァレリーの思考は爆発した。

猛烈に顔が熱い。

きつと今、自分の顔はリンゴみたいに真っ赤に染まっているに違いない。

そこへ追い打ちをかけるようにクロエの声が降りかかってくる。

『ほう。その分だと、色恋に鈍いお前でもようやく俺の意図が分かったようだな』  
ふにゅり♡

前足の柔らかい肉球で乳首の近くを押される。太い舌が伸びてきてうまそうに頬を何度も舐められる。

「ちが……う。その、こういうことは……人目のつかない場所でするものだろう！」  
ここには同僚のキールがいる。

十年来の友人のそばで、神の遣いである白狼に抱かれるなど、恥ずかしい。

『ふん。キールとやらなら酒でつぶしておいたぞ。奥で寝ている』

クロエがその巨体をどかし、小屋の奥を見せてくれた。

入り口の土間から数歩すすんだ先に暖炉があつた。その奥に寝室がある。

寝室からは聞き慣れたキールのいびきが響いていた。

『犬好きらしく、俺の毛並みをさんざん堪能したあと、勝手に酔いつぶれて寝た。まあ、お前が友人としてきたのもよく分かる。あれは無害な男だな』

再会後、キールにはアズノフたちの顛末<sup>てんまつ</sup>を嘘偽ることなく手短に話したが、彼は文句の一つすら口にしなかった。

むしろ長年アズノフと私の微妙な対立を知っていただけに、私を心配し、ねぎらってくれたほどだ。

「ああ、私にはもったいない友だ」

暖炉の火と天井からつり下げられたランプの灯りで、奥で寝入るキールの赤毛がうっすらと照らされている。

規則的に揺れる赤毛がとても愛おしく思えた。

キールの寝息に聞き入っていると、クロエがぼそりとつぶやいた。

『——だが俺の前で、ほかの男に懸想するというのはいただけん』

「あ……ッ」

キールの姿がクロエの白い毛並みにさえぎられる。

そのまま地面に押し倒され、破れた上着のすき間から乳輪を、肉厚な舌でしゃぶられた。

「っ」

乳首をピンクの肉球で転がされるたび、あらもない声が吐息と一緒に漏れてしまいきそうだ。息が詰まる。

クロエの攻撃から逃げようと身をよじるが、そのたび爪にぬいとめられた上着はただけていく。

必死にキールが起きないことを祈って耐えようとするが、クロエの責めは的確だった。

「や……ア……こ、んな……ッ♡ 地面で——ッ！」

『なんだ、ベッドでやる方がいいのか？ 俺は構わんど。キールとやらが起きたとき、お前の乱れた姿を見たらどう思うか、分かんが』

「そっ……んなこと……！」

『できまい？ ならここで素直に興じるのもいいものだぞ』  
にやりと金色の瞳が細められて、楽しげに笑う。

（——なにが神の遣いだ！ こんなっ……ただのスケベ狼ではないか！）  
屈辱に目を渗ませていると、肉厚な舌で涙を舐めとられる。

『スケベ狼とはひどいな。お前の体目当てにあれだけ頑張ったというに』

「っ！ 貴様、私の思考を勝手に——！」

『覗こうと思えばいくらでも覗けるぞ。なにせ俺は白狼王だからな』

ふふん、と鼻を鳴らしてしっぱをぶんぶん揺らす姿は、飼い主に褒めてもらいた  
い忠犬そのものだ。

『あそこまで俺を使い倒したのだ。褒美くらい与えるべきではないか？　我が妻よ』  
「っ！　だからそれが間違いだと言っているだろう！　私の身体は、……………」  
あと一步のところで、言葉につまる。

あの『呪い』のことを話したら最後、彼は激怒するのではないかと思ってしまう。  
過去に自分の身に起きた様々なできごとがよみがえる。

呪いのせいで理性をなくされて恐怖した者、私を軽蔑した者、怒りに駆られた者。  
多くの男女たちがこの呪いに惑わされた。

神殿に入ってから呪いを解くことはかなわず、同僚たちと距離があいた。  
貴族と平民というだけではない。

呪いのせいで、アズノフたちとも腹の割った会話ができなかった。

その結果が『あれ』だ。

クロエに話せるか？

あの求婚が自分の意思ではなく、呪いのせいで発動したなど知ったら、誇り高



い彼は許せなくなるのでは？

それは神の遣いである彼にとって一生、汚点<sup>おてん</sup>となるのではないか？

激怒して私に牙を向けるのは構わない。

いつその身に牙を突き立ててくれた方がまだ増しだ。

だが真実を話して彼を傷つけるのが怖かった。

『おいどうした。急に黙るな』

くうん、くうん、と甘えた声で懷かれる。そつと顔を上げると金色の瞳とかち合  
った。

その目は恐ろしくおだやかで美しく、慈愛に満ちていた。

どんな言葉も受け入れる大らかさがその瞳にはあった。

時間にしてたった数秒だったかもしれない。

だが決意を固めるには十分すぎる時間だった。

ぎゅっときつく齒を食いしばり、彼の目を真正面から見つめる。

「少し、長い話になるがいいか？」

彼が頷かなくても話すつもりだったが、彼は瞳に穏やかな静寂をたたえたまま、  
続きを促した。

なまつば

ごくりと生唾を飲み込み、今まで誰にも話したことがない己の過去を明かした。  
血を流して傷ついた者を手当てしただけで相手の理性を奪ってしまうこと、男女  
見境なく襲われかけたこと。

神に仕えればこの『罰』も消え去るのではないかと思っていた時期もあったこと。  
そして——この呪いで人と深く関わる事がへったこと。

だから今も友人であるキールはとても大切な存在であり、長男でありながら家を  
出ることを許してくれた家族のこと。彼らには感謝してもしきれない。  
そういったもろもろの不安を全て語った。

『……そうか……』

「ああ、だからあなたが私を妻にする理由はどこにもないし、この契約は犬に咬まれたとでも思つて忘れてくれ」

『嫌だ』

「ああ、そうだな——うん？」

今、彼は嫌だと言わなかったか？

げげんな顔で見返すと彼は、ふすん、と鼻息を鳴らした。

『だから嫌だと言つたのだ。そもそも考えてみよ。この俺が、今代の白狼王たる我が淫魔ふぜいの呪いにあてられると、本気で思うたのか？』

「いや、だが……しかし……」

『そも貴様の呪いというやつは今、分析してみたがごく微弱だ。初対面のものに好意を抱かせやすいという性質は持っているが、それだけだ。催淫効果など見当たらず、貴様に襲いかかつてきた者どもは、もともと下心があつたのだろう。人間に

しては見目が良いしな。お前は』

ぱくりとペールブラウンの前髪をくわえられて、舌でもてあそばれる。

「私の見目が良い……？」

そんな風に自分の容姿を感じたことは一度もなかった。

むしろこの世で一番おぞましいものだと感じて、生きてきた。

しかしクロエはこちらのことなどお構いなしに、どんどん言葉をつらねていく。

『俺から見たら上等な部類だな。この淡いブラウンの髪も、赤面したらすぐ分かる真っ白な肌も、鼻筋も良いし、唇の形も良い。砂糖菓子のカaramelみたいな瞳も良い。なにより……』

そこでクロエはもったいぶるように言葉をくぎった。

これ以上言われたら、顔から文字通り火が出そうだ。

（——恥ずかしい！）

今までこれほど自分の顔や体を褒めそやされたことはなかった。

彼に過去を明かした後だから、余計に彼の言葉が真に迫る。

『魂の色が良い。淡い月光のような、ほんのりとした白が実に俺好みだ。確か人間

はこう呼んでいたか。月白と』  
げっばく

ごろごろと喉を鳴らして、私の胸に真つ白な毛並みの頭を押しつけてくる。

おずおずとまで返すと、不意に彼が顔を上げた。

金色の瞳がじつとこちらを見つめてくる。その目にはありあまるほどの情熱と欲望が渦巻いていた。

雄の顔だ。

呪いなど関係なく、ただひたすらに私を求めている男の顔だった。

「……あ……、やはり待つ——」

『もう待たん』

抵抗の言葉は深い口づけに全て奪われた。

「待て！ 待ってくれ。キールが寝ているんだ。もう少し別の場所で……っ！」

小屋の入り口で押し倒され、クロエの赤く太い舌が口のなかに入ってくる。

口内で唾液がからみあい、小さな舌を何度もきつく吸われた。クロエの体を押し返そうとするたび、前足の肉球で乳輪を軽く押される。

柔らかい桃色の肉球に乳首をふみしだかれる度、体の奥がざわめく。

時刻は深夜。

村人たちも今夜の襲撃で疲れ切って、みな寝静まっている。

かすかに虫の音が聞こえてくる程度だ。

とても穏やかで静かな夜だった。そんな夜更けに四つ足の神獣とまぐわうなど、どうかしている。

「クロエ……その、頼むから……!」

『待てんと言っただろう？ 俺がどれだけ待たされたと思っている』

「……んっ。くっ! ……あ……出会って、数時間しか経って……ないだろう!？」

『一度、抱くと決めたらからは途中でやめる気はない』

太いしっぽが太もものに絡みついて離れない。

自分より三倍は太い舌を口にねじこまれて、口の粘膜をなめられるたび、背筋がぞくぞくした。

（なんだ!? こんな感覚、今まで一度も……!）

『そろそろ効いてきた頃か』

「貴様……一体、なにを……!」

薬を仕込まれた記憶はなかった。だがやけに身体が熱い。それにクロエの行動ひとつ一つに敏感に反応してしまう。

『お前の柔肌に刻んだ契約の印よ。あれはただの印ではない。こうしてお前とつがう時、絶大な催淫効果をもたしらしてくれる。要は俺の子を確実に孕めるようにする為のものだ。存分に快楽を楽しめ』

「や……あ……くっ、うう……催淫……？」

心臓の鼓動が激しい。クロエの肉球に体をまさぐられるたび腰が跳ねてしまう。純白の毛並みに肌をくすぐられて甘い疼きがあふれ出す。

今まで男や女に襲われかけた時、こんな感覚になったことは一度もなかった。どの体験もおぞましく醜悪で気持ちの悪いものだった。

けれどクロエとのふれ合いは違う。

とくん、とくん。

鼓動が乱れて、彼にもっとふれてもらいたいと思えてしまう。

そこに怖さやおぞましさはひとかけら一欠片もなかった。



「……だめ、だ。……私は……神に仕える身であつて……こんな、こと……！」  
『神の遣いたるこの俺と交わるのだ。神に叱られることはなからう。ほら、舌を出せ』

ついついクロエの命令に従つてしまふ。

太い舌が口から抜かれ、自ら舌を伸ばす。赤い小さな舌に太く長いべろがまとわりつき、ちよんちよんと引っ張られる。

そして思いっきりしゃぶられた。

ぢゆる♡ ぢゅううう♡♡♡

いやらしい音が部屋中に響きわたる。

舌の根からなめられ、平らな舌腹をつつかれたかと思えば、何度も舌をしごかれる。

「やあ……ア……あ……っ！」

『可愛い声を上げてくれる。実に良いメスだな。俺の妻は』

「……っ……ア♡ ……わたし、は……男だ……ッ♡」

『こんな可愛い悲鳴を上げているくせに？ ほら乳首がたってきたぞ。俺の足で感じているんだろう？』

くにゅ、くにゅ♡♡

ピンクの肉球で乳首を転がされると体中に甘い痺れが走る。

クロエの責め苦に感じて、自分の性器が勃起しているのが分かった。

（やだっ♡ ……あ……こんな、交わり……っ♡ 体が……慣れてしまう……う）  
神の遣いとはいえ、相手は四つ足の獣だ。

こんな交わりは経験したことがない。もしもこの方法に慣れてしまったらと思うと、恐ろしくて堪らない。

他人に、なにより友人のキールがすぐそばにいる場所で、こんな交わりをしている人間だと知られたくない！

また心を読んだのか、クロエが目を細める。

『ふん。キール、キールとあのオスばかり気にしておって。やはり獣の俺とは交わりたくないのか』

金の瞳が拗ねた輝きを放つ。

その表情はむくれた子どものもので、なぜか胸を締め付けられた。

「そう、ではない！……ただ、その、こういったことは初めてだから……どうすれば良いか、分からないのだ……」

自分の声が消え入るように小さくなっていく。

女とまじわった経験がない——童貞だと告白するのは、かなり恥ずかしかった。今夜だけで何度顔から火が出たか分からない。

するとクロエはなぜかご機嫌になっていた。さつきよりも上機嫌にさえ見える。

『ふふん。そうか。『俺が』初めてか！それは良いことを聞いた。たくさん気持ち良くさせてやるからな！』

やる気もみなぎっている。

「待っ——っ♡♡♡♡」

むぎゅう♡♡♡

勃起してふくらんだ股間をクロエの後ろ足で揺らされる。

ズボンのなかではちきれんばかりの竿がキュウキュウと締めつられける。そこにクロエの肉球が乗せられて、あらぬ快楽を流し込まれた。

「やっ♡ それ、だめっ♡ 足、ゆらす、なあ……！ あ♡ あ♡」

急速に甘い痺れが下半身に集中し、玉がふくらむ。精子が昇ってくるのが分かる。  
(足でイカされる……なんて、絶対、ダメだ！)

歯を食いしばって耐えようとするが、すでに印を刻まれた体には無理だった。

「——やあああ♡♡ クロエ……エ♡ ……めっ！ 離せ……離してくれ……イ

ツちゃ——！」

『イケ』

命じられた瞬間、下半身がゆるみ、ズボンのなかで射精する。

じゅ、ふふふふ♡♡

またたく間に下着が濡れていくのが分かる。彼の目の前でぶざまに射精してしまった。

その事実には羞恥心が高まり、再び体が昂ぶっていく。

『ほう、結構たまっていたんだな。まだ出そうだなぞ』

ぐに、ぐにに、ぐにゅ♡

イッたばかりの竿を肉球で押された瞬間、竿に残っていた精液がまた出る。

「あ♡ — あ♡ — やあああああ♡♡♡♡」

甲高い声を上げると同時に下着がびしょびしょになる。ズボンに新たなシミが浮かびあがった。

両肩で息継ぎをしながら、はっと我に返って寝室を見る。

良かった。キールは眠っている。

その事実にはっとした瞬間、顔に影がさした。

『お前の相手は俺だと言ったろう?』

睥睨へいげいしてくるクロエの顔はさつきよりも不機嫌だった。

『誰の妻か、今夜しつかり覚え込まさないとイケないな』

「あ……そういうつもりでは……ッ♡」

逃れようと身をよじるがもう遅い。

巨大な狼に押し倒され、乱暴に竿を肉球で押される。

うまく動けない。下着の中をどろどろの精液が伝い、ズボンにしみだした。

『俺のもイカせてくれるんだろ。なあ、ヴァレリー』

名前を呼ばれて、さらに心臓がどくどくと早鐘を打つ。

クロエに名前を口にされるたび、イキそうになる。

「名を——呼ぶ、なっ♡ 呼ばれたら……ッ♡ ッ♡」

『呼ばれたら、何だ?』

全部分かっているくせに！

キツく睨んだが、クロエは面白そうに目を細めている。

『俺の前で恥ずかしがることはないだろう？ ヴアレリー』

ず、くん。

ひととき下半身に強い疼きが生まれる。二回も射精したはずの性器がまたムクムクと反応している。

さっきので精液はもうカラのはずなのに、イキたくて堪らない。

ズボンの中でもいい。全部ぶちまけたい。

「——やああああ……ア♡ あ、ああア、ア♡♡」

信じられないほど高い声が漏れた。

びゆるるるる♡♡♡

自分の射精音が聞こえる。なのに精液は一滴も出ていない。下着は濡れず、ズボンに新たなシミもできていない。

ただ体は圧倒的な射精感に包まれていた。

断続的に淫靡な快感が続き、胸が上下し、乳首が勃起する。腰が浮いて、ぱんぱんにふくらんだ股間をクロエの腹にくっつけていた。

ふさふさとした毛並みにふれるたび、こそばゆさと気持ちよさに襲われた。

「やら♡♡ これ、やらあ……あ、ア……アア♡♡♡」

女みたいな声を上げながら、形容しがたい悦楽に包まれる。

法悦の波に身体中をおおい尽くされた。

ようやく波が収まった時には、息も絶え絶えだった。

『良いイキっぷりだったぞ。今のがメスイキというヤツらしいな』

「……………らしい？」

『キールとやらが娼館で女相手にやってた事を聞いてな。つい、お前のメスイキが見たくなった』

つい、でやられては身も心も持たない。



何より神の遣いである神獣に何てことを教えているんだ。あのバカは。

すうすう、と寝床でのんきに寝ている友人を張り倒したくなった。

『良い気分だっただろう。だから今度は俺のを頼む』

ぶるん、と大きなモノがクロエの腹毛の奥でぶら下がっているのが見えた。

先っぽからは、だからだと透明な液体が垂れている。小屋の明かりに照らされたソレはゆっくりと姿を現した。

クロエの勃起した肉棒だった。

竿はほんのりとピンクに染まり、尿道からは透明な液体が溢れてはしたたり落ちる。ポタポタと垂れた液体でヴァレリーの白いズボンに新たなシミができた。

「や……ア………なっ………」

あまりの大きさにたじろいだ、あつという間に距離をつめられる。

ぬっ、と鼻先に竿を突きつけられた。

先走りの雫が頬や鎖骨にかかり、ぷうん、と独特の匂いが漂って体を刺激する。

尿道から溢れた液体が逞しい竿に一筋、ふた筋と垂れて、浮き上がった血管に阻まれて溜まる。見ているだけでヴァレリーの身体がまた火照る光景だった。

『お前の体でイカセろ』

もう頼むような言いぐさではなくなっていた。完全に命令となった言葉に、印を刻まれた体は従順にしたがってしまう。

自然と手が動き、自分の体を守っていた最後の砦——騎士服を脱いでしまう。雪のように白い肌があらわになる。

『綺麗だぞ』

「言う……なっ……。ばかものっ」

やぶけた上着を脱ぎ、ズボンを引きずり下ろすと、彼の視線が股間の濡れた下着に集中しているのが分かった。

『どうした。早く脱げ』

ぐっしよりと濡れた白い下着を脱ぐよう言われるが、あんな逞しいものを見せら

れた後で、自分の性器をさらす勇氣はなかった。

「このままでもいい……だろう……？」

せめて下着だけは死守しようとするが、彼は無慈悲だった。

『駄目だ。全部俺に見せろ』

おずおずと下着に指をかける。

必死にクロエの視線から避けようとするが、彼はお構いなしだった。

鋭い爪を出して地面をえぐる。命令に逆らうことは許さないという強い意志があった。

いやいや下着をおろした。

ぷるん、と萎えた自分の性器が顔を出す。

くんくんと匂いを嗅がれる音が恥ずかしい。

「やつ……ッ。見る……なあ！」

『ほう。なかなか良い形をしているではないか。俺ほどではないがな』

わふっ！ とクロエが嬉しそうな鳴き声とともに飛びかかってきた。

地面に倒される！ と思ったが、衝撃は柔らかかった。

少し硬い寝床に瞬間移動していた。

「え……？」

『この俺が妻を抱くのになずっと地面でやるわけがなからう。まあ、そういう趣向も機会があれば試してみたいが。今はここにもっと面白いオモチャもあるしな』

くいつとクロエが左側へ首をめぐらせた。

そこにはもう一つベッドがあり、今は友人のキールが眠っていた。すうすう、と静かに寝息を立てている。

『安心しろ。防音と遮断の結果を張っている。あちらからはお前の姿を認識することはない。代わりにこちらは奴の姿を見ながらお前と交われるわけだがな』

それはつまり嫌でもキールの存在を意識しながら、彼と交わるということだ。

十年來の友が寝ている横で聖獣と初夜を迎えるなど、正気ではない。

しかもクロエの意思次第で結果は簡単に解くことができる。

そうなってもしもキールが起きてしまったら、自分の痴態を彼に見られてしまう。手をのばせば届くほどの距離だ。

自分の浅ましく乱れる姿をもし彼が見てしまったら、今日まで築き上げてきた友情は終わる。

背筋をつめたいものが走った。

『——お前が俺をすぐに満足させてくれれば問題ない。違うか?』

もはやクロエの囁きは悪魔だった。

神獣とは呼びがたいほど、狡猾で汚い。

けれど催淫効果にさらされた身体はクロエを求めていた。もっと深い場所ですなりたいと訴えてくる。

(私が頷くと分かっていて……っ！)

いいさ。さっさと終わらせてやれば、クロエも満足するだろう。そうすればこの

初夜の時間も早く終わる。

意を決してヴァレリーは口をひらいた。

「分かった。とつと伊かせてやる」

きつく睨みすえると、クロエは楽しそうにしつぽを揺らした。



「へあ……ッ♡ ……ひゃ………やつ、そんな♡ 尻のあいだに……すべらせる……なっ♡」

ヴァレリーはベッドで裸のまま、四つん這いにさせられていた。背中の上にクロエが乗っかり、腰に抱きついていてる。

時刻は深夜。

ヴァレリーの股間からは粘液がしたたり放題だった。ベッドのシーツに大きな染

みをつくる。

クロエの逞しい性器が、尻の割れ目で抜き差しを繰り返す。

柔らかい亀頭がヴァレリーの竿の根元に吸い付き、まるでキスをしている音を立てた。

くちゅ♡ にちゅ♡ にちゅ♡♡♡

『可愛い音を立ててるのだな。俺の妻の体は』

「——ッ、黙れ！」

一喝したが白狼は悪びれもしない。

『<sup>すまた</sup>素股というらしいぞ。実に便利だな。他人の知識を拝借するというのは』

細い透明な糸が薄闇にほんのりと白く浮かび上がっていた。

蜘蛛の糸のようにか細いそれはクロエの頭部から伸びていて、キールの頭にぴたりとくっついていた。

『お陰でお前を喜ばせる方法をたくさん手に入れられる。良い友人を持ったな。ヴァレリー』

今夜ほどキールの娼館通いを問いつめたかった日はない。

(あれほど節制しろと言っていたのに……！)

今となってはあとの祭りだ。

腰に抱きついた狼はぎゅっとしがみついて離れない。

太もものにぬりつけていた亀頭を再び股ぐらにすべらせてくる。

「やつ♡ 裏側……なぞる、なっ♡ この……ヘンタイっ♡」

狼の竿と比べたら子どものような性器の裏側にクロエの亀頭がぴったりとくっつく。先走りをべつとりと裏筋につけられ、背筋がぞくぞくした。

『どうした？ 俺を満足させるんだらう？』

この程度かとあざけられ、太ももで彼の竿を挟もうとしたが、柔らかな亀頭で裏筋をなぞられると、太ももがガクガクと震えてしまう。



『実にうぶい反応をする。もつといじめたくなるではないか』

「あ——なに、を……す——っ♡♡」

どちゅん♡♡

突如、裏筋をなぞっていた亀頭が角度を変えて、へその下——あの刻印がある場所を突いた。

体中に甘い痺れが走り、からっぽなはずの自分の性器から透明な液体が漏れる。

「やあ……………ア……………アアア♡♡♡♡」

甲高い声が漏れてしまう。

枕にしがみついて声を押し殺すが、完全には防げない。

「っ♡ ツ、っ♡ っ♡♡ らめっ♡ そこ、突く……………な……………ツ……………ア♡」

『なぜだ？ 気持ちいいだろう？』

懲りずにまたつつかれた。

ぶちゅん♡ ぶちゅん♡ ぶちゅ——ちゅううう♡♡

これでもかと反り返った竿を印が刻まれた柔肌にぶつけられる。

クロエの神気で隠れていた印は今や血のように赤い印を浮かび上がらせていた。

それが先走りで薄桃色に滲んでいく。ねばついた液体がいくつも糸を引き、厭らしい橋を架ける。

白い体液で作られた橋は重力に負けて、ついにシーツに落ちる。

ヴァレリーの白い肌にじつとりと汗が浮かび、月明かりに照らされた。と、そこへ――。

「……う、んん」

キールが隣の寝台で寝返りをうった。顔がこちらを向く。

その目はしっかりと閉じられているのに、彼に見られている気がする。

「……や……あ、ア、あ……だめ。見るな……あ♡♡ ……見ないで……くれ♡」

あつという間に全身が敏感になり、体がちぢこまる。だがそれはクロエの竿を太ももできつく挟むことも意味していた。

二、チュウウウ♡♡

熱い竿が徐々に硬くなっていき、ふくらんだ睾丸がもの内側に当たる。今までゆっくりとしか動いていなかったクロエが猛然と腰を振り始めた。

「やつ！　ア、……動くな……、はげし……ッ♡♡」

引いたかと思えば、股の間に激しく太竿をねじこまれる。刻印めがけて何度も龟头をぶつけられ、甘い疼きがわき起こる。

もう自分の股間も性器もクロエの先走りでべつとりと濡れていて、シートには水たまりができていた。

クロエの前足が腹にしがみつき、後ろ足が太ももにかけられる。

逃げようにも逃げられない体勢。

太いしっぽが暴れまわり、ふくらはぎを叩いた。

凶暴な竿は時おり位置がずれて、ヴァレリーの竿裏をなぞりあげた。

びゅくくく♡♡

可愛らしい音を立てて、射精してしまう。

それでもクロエの動きは止まらない。

神の遣いであることも忘れ、一頭の獣のように腰を振る。

「やあ♡ ……、……クロエ♡♡ 待て！ 待って！」

『ぐううう。出すぞ。お前の体、俺の、精液、全部、塗りつける』

寧猛な唸り声とともに、腹に爪が食い込む。

つぷりと赤い血の滴が生まれ、彼の体液に溶けていく。

ずくん。

彼の脈打つ音がひっきりなしに聞こえて、射精が近いことを知る。

（だめっ……キールのそばで、こんなの……経験したくな……っ♡ ♡♡ ♡♡

やあ♡♡♡♡♡）

ベッドの上で這いつくばって逃げるが、クロエの体は離れない。そのまま四つん

這いの身体に背後からきつくしがみつかれた。

ぶ、びゅるるるる——るるる♡♡♡

激しい音を立てて精液を腹の刻印めがけて、ぶちまけられる。その一滴ごとの熱さに印を刻まれた身体はあつという間に陥落した。

「あ……あ……ふ……ッ……う♡♡……ウ♡ うんん——ッ♡♡♡」

びゅうううう♡

愛くるしい音とは裏腹に自分の性器からおもらしが漏れる。

小さな噴水のように噴き出して、クロエのぶちまけた精液の上にかかる。

ねっとりとした精液が自分のおもらしで混じり合い、濡れていくさまを見せられて、激しい羞恥心に襲われた。

それが例の催淫効果とまじりあい、さらに漏らしてしまう。

『おう、おう。初々しい音を出すな。我が妻よ』

妻と呼ばれて体が勝手に歓喜する。

(い…やだ。こんな、子どもみたいな…粗相そそう、成人にもなって…っ♡ ツ♡)  
涙と汗でぐちゃぐちゃになった顔をなんとか手でぬぐおうとするが、羞恥心によ  
つて突き上げられた快楽はとまらない。

今度はぐっしよりと湿ったパールブラウンの陰毛に亀頭をつっこまれる。

もそもそと動きまわる竿は尚も自分の短い竿の亀頭をこづいてくる。

『逃げまわるお前のチンコをいじめるのは楽しいなあ、ヴァレリー』

「だ、まれ……………この、色魔っ」

『そうか？ 俺よりお前の方がよっぽど色魔な気がするが？』

「誰が……………今のは、ただの条件反射……………だっ♡♡」

全てクロエに刻まれたあの印のせいだ。

断じて自分のせいではない。

『まだ抵抗できる余力があるならココに入れても構わんよな』

ようやく股ぐらから引いてくれたクロエの竿が今度は尻に乗る。

割れ目に精液をしたたらせるように竿が尻に食い込み、ずり下がってくる。濡れた亀頭がぴたりとある場所で動きを止めた。

そこは……確かに穴があった。

『たっぷりメスイキしたせいかな、もの欲しそうに入り口がひくついてるぞ。いいよな?』

「や……あ……ッ♡」

熱い吐息とともに首をふることでしかなかった。

『きゅうきゅう締まってはひらく。なんとも可愛らしい口ではないか』

ふと尻に乗せられていた性器が離れる。

あの逞しいものが入ってくるのかと体が緊張したが、近づいてきたのは熱くぬめるものだった。

ぴちゃ♡　ぴちゃ、ちゅる——ッ♡　ぢゅるるるるるる♡

(やつ——まさか、これは……吸っている?!)

クロエの太い舌が自分の尻に吸い付き、臀部でんぶをなめまわす。  
はつきりと脳裏に赤くて、太く、肉厚な舌が思い浮かんだ。

それはゆるんだアナルに隙あらば入り込み、粘膜をなめまわす。

「っっ♡♡」

『まずは俺の舌できれいにしてやろう』

振り返るとクロエは私の尻に顔をくっつけていた。肉厚な舌で吸い上げられる度、  
四つん這いの腰が揺れる。内ももがびくびくと震えて、抵抗できない。

(早く終われ! 終わってくれ!)

せめてキールが目を覚まさないうちに、この情事を彼に見られずに終わらせたい。  
そう思うのに、ぬめった舌はどんどんアナルに入り込み、粘膜をとろかす。

『この俺の神気でまずは綺麗にしてやる』



唾液と一緒に神気を流し込んでいるのか、芳醇で華やかな香りが漂ってくる。舌で綺麗にしてやると言われたが、実際は獣の神気にアソコを洗われているようなものだった。

『俺がつけた印のお陰だな。お前の愛液があふれてきて、うまいぞ』  
ずぞぞぞぞっ♡♡

下品な音を立てて吸われるたび、全身が羞恥でちくちくと苛まれた。体内で形を変えた舌をさしこまれて穴を広げられる。それがぷっくりとふくらんだ場所をかすめた。

萎えたはずの性器が力を取り戻し始める。

『———そういえば、人の体には前立腺というものがあるらしいな』  
「えっ」

『キールの知識は実に役立つな。お前のはこの辺か？　なあ、ヴァレリー』  
くちゅん♡♡

今まで奥へ突き進むだけだった舌が突然、方向を変えて左右に暴れ始めた。

敏感なひだが肉厚な舌に押し広げられる。

『このコリコリとしたところか』

ぐにゅん♡　ぐに、ぐに、ぐちちっ♡♡

舌先で内側を押し込まれた瞬間、自分の性器が一気に硬くなった。

『おお、面白いくらい反応しているな。そうか。気持ちいいか』

「やつ♡　違う♡　離れ——、舌を抜け……ア、ひいッ♡♡」

手を伸ばしてクロエの顔を尻から遠ざけようとしたが、また前立腺をつつかれ、手が止まる。

長い舌でしゃぶられ、飴玉のように転がされた。

玉遊びをするようにもてあそ弄ばれて、尻をふることしかできない。

『おうおう、こんなにケツを揺らして。やはりお前の方が俺より色魔のようだぞ。』

これならサキュバスの先祖返りも納得だ』

「っ……呪いのことは……言う、な……あ♡ あ♡」

『今まで貴様を襲おうとした連中はみな呪いにかこつけて襲ったに過ぎん。お前の容姿がそれだけ魅力的だったと言うことだ。俺には効かんがな』

ぐちゅ♡

また前立腺を舌で押しつぶされ、その感触を勝手に味わわれる。

左右に寄せては丹念にしゃぶられて、身も世もなく喘いだ。

『ふふん。お前のちんちんもイキたそうだな。特別に俺の肉球でいじってやろうか?』

「——い、らない! ……けっこう、だ……っ♡ ツ」

ちよろちよろと透明な液体が尿道から漏れ出していく。

恥ずかしくて足を閉じようとしたが、アナルをしゃぶる舌のせいで足がもつれる。

(もう見られても良い! イキたい!)

ガクガクと足を震えながら、精液が昇ってくるのを待つ。  
が、しかし――。

『ただ射精するより、こっちの方が気持ちいいぞ』

く、ばぁぁ♡♡♡♡

射精の瞬間、クロエの舌が抜かれ、アナルの入り口を思いつきり広げた。

精液が出てこない。寸止めさせられる。

「え、やら……なん、で……。……あ、ア、あ、やらぁぁ……アア……あ

ああ♡♡」

ぐぼっ♡　ぐぼ、ぐぼぼっ♡　パチュ、パチュ……パチュパチュ………ツ♡♡♡

高速でアナルが開閉を繰り返すが、イけない。

寸止めさせられた愉悅が体内で暴れまわり、それがまたアナルの開閉を増やし、  
ぐちよぐちよに濡れた淫猥な音を響かせる。

「やだ！　ア♡　ア♡　……お尻の穴……開いちゃ………、見るな！　見るな、

あ、ああ……、……アア♡　くくッ、っ♡」

みっともなく喘ぎまわり、煩悶の声を上げる。

甲高い悲鳴がアナルの開閉する音とともに部屋中に響きわたる。

『いい啼き声だ。褒美として、存分にイけ』

アナルをくっぱりと広げていた肉厚な舌が再び体内に入り込み、前立腺を叩いた。

「ア♡　ア♡　イ、く！　イクうう……ウウウ……うううう♡♡」

びゅ、くくくく♡♡

シートの上に精液をひっかけてまま、耐えきれなかった腰が落ちる。

クロエの舌がずり抜けたが、快楽に染まった体はそのまま、ベッドのシートにゆ

っくりと股間をこすりつけてしまう。

竿が濡れたシートと擦れあい、気持ちいい♡

(あ、あ……やだ♡　もう……ッ♡　……勝手に、腰が……動いちゃ……ッ♡♡)

びゅ♡　びゅ♡　びゅううう♡♡

シーツのすき間から愛くるしい射精音が漏れた。

ようやく収まった頃には自分の身体もベッドもひどい状態だった。そこへクロエの声が覆いかぶさってくる。

『実に可愛らしかったぞ。それでは本番と行こうか』